

幼稚園の現場から

III

鶴谷主一

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長

■幼保一体化問題の報道は・・・

幼稚園と保育所を一体化して2013年度から順次「こども園(仮)」とする方針。皆さんも報道などでご存知かと思いますが、どんなイメージをお持ちでしょうか。

おおかたの報道では、

- ①幼稚園は文部科学省、保育園は厚生労働省という縦割り行政の無駄や弊害を防ぐべきである。
- ②待機児童増でキャパを増やすことに限界がある保育所、そして少子化で園児数減少の幼稚園。これを一緒にしちゃえば待機児童問題、幼稚園の経営問題も解決!
- ③保護者がそれぞれの事情で、好きな時間帯だけこどもを預けて働けるので、ライフワークバランスに応じた子育てを支援することができるようになる。
- ④働きたい母親を家庭から社会に出し、大いに働いてもらい、納税者を増やし国の税収をアップ。

⑤NPOや企業などの参入を促進し、競争原理によって活性化し、経済成長と雇用を生み出し、おまけに淘汰により保育の質が向上していく。

主にはこのようなメリットが強調されており、幼稚園や保育園の現場が業界団体の既得利益を守る為に反対運動を起こしている。その反発に配慮したか、2010年11月16日の第3回幼保一体化ワーキングチームの報告では明らかにトーンダウン、現幼保を存続させるなどの譲歩案が盛り込まれた5つの案が提示された。団体の圧力により幼保一体化が骨抜きにされる可能性も出てきて心配だ。(しっかりやってくれ!)

このような論調の中で、現場の人間は単に自分達の利益を守るために改革にブレーキをかける抵抗勢力のように言われています。幼稚園、保育園の現場は、なぜ強く反発しているのでしょうか。今回はこの問題についてレポートしたいと思います。

■幼稚園組織からの提言

政府は、今年の4月に新システムについて基本方針を出した。

すぐに反応した全日本私立幼稚園連合会は、「慎重に進めるべき」との立場から5つの提言を行っている。

まとめてみよう。

1 全てのこどもには、良質な教育を受ける権利がある。幼児期の教育環境は人が育つ上でもっとも重要な要素となる。教育に軸足を置いた国家戦略をすべきである。

2 全ての親は、子育てを通して人として成長する。親が子育てに一定の時間を割くことができる社会制度の充実が重要である。

3 認定子ども園を活用しやすくすることで、幼稚園からの自主的な移行を促進し、それぞれの地域事情に合った待機児童解消に向けた動きが活発になる。全国一律に制度を統一する必要はない。

4 幼稚園は地域の子育ての重要なインフラである。制度改革によって地域にとって必要な小規模園がなくなることは大変な損失である。OECD並みの教育投資を行い、健全な運営が保たれるような制度設計が必要。それが学校教育を支え、将来の日本を支える人材を育てることにつながる。

5 社会の中で、否応なく子どもが「保育に欠ける状態に追い込まれている家庭」、

親の人生選択の中で「保育に欠ける状態を選んでいる家庭」、「家庭での子育て」を大切にしている家庭」への支援を同一にすることは無理がある。親への目線ではなく子どもの育ちを考えた目線で公平な助成制度の確立が重要である。保育に欠ける場合であっても8時間を限度とし、教育・子育て・就労支援を改めて整備し、親子の時間を確保すべきである。

■進まなかった認定子ども園

いま改めて5つの提言を読み返してみると、とても大切なことを言っていると感じます。しかし、その頃の私たち幼稚園長の間では、まだまだ身に迫った問題ではなく「ホントにやるの？できるの？できっこないよ」と冷ややかな反応が大半だった。



旅芸人「のぼさん」園コンサート あそび歌がいっぱい

なぜなら2006（H18）年10月から、政府は「認定子ども園」制度を創設し、幼保一体化施設の推進を奨励してきたが、少子化に悩む過疎地の公立園や、野心的な私立園でわずかに実施されただけで、ほとんど普及しなかったからだ。受け入れられなかつ

た原因は、施設整備の条件は結構厳しいのに比べて補助金額が少ないことと、幼保それぞれの事務手続きが必要で、実質事務量が倍に増える煩雑さが敬遠されたのだ。数字をあげると平成22年4月現在の静岡県内の総幼稚園数520園中、認定はたったの5園しかない。

制度が始まった当初、私も園の保護者に「認定こども園は便利ですが、ウチの幼稚園がやるとしたら賛成ですか？」と聞いたことがある。

原町幼稚園は、幼保が同じ敷地内に建ち、園庭を共有し、私が幼稚園長になる前は妻の実母が両方の園長を兼ねていたことから、50年以上も幼保連携して保育を行ってきた。職員同士も仲が良く、施設や教具なども貸し借りする間柄だ。現在は私が幼稚園園長、妻が保育園副園長、妻の実母が保育園園長という典型的な親族経営で、我々の関係が良好ならば幼保の職員間も良好という状況を保っている。

こんな状況だから認定こども園に移行しようとするれば、ハードルは低い。しかしお母さん達は全員首を横に振った。「保育園でなく幼稚園に入れている」という親の意識も便利さとは別のところにあったのだ。

■急浮上！「こども園」構想

認定子ども園施行から約5年目に入った今年、にわかに熱気を帯びてきたのは残暑厳しい9月頃のことだった。いよいよ業を煮やしたか、民主党政権になって公約を守

るためか、一気に「認定」を取っ払い、国県の責任を放棄し、市町村お任せタイプの「こども園」に教育を投げてしまおうという暴挙に出てきたのだ。

どう暴挙なのか、次の記録を読んで現場とのギャップを感じてもらいたい。



「キャベツがキャッ！」みんなの目が集中！

●文部科学省との意見交換会

各地で文部科学省の説明会が行われはじめて、「静岡はまだか？どうなるんだ？」と少し気になり出したのが今年の夏。やっと9月21日に文科省、初等中等教育局幼児教育課 課長補佐という実務の中心にいる官僚さんを招いて「意見交換会」が開催された。

約2時間の意見交換会。文科省の課長補佐が気の毒になるくらい「具体的には何も決まっていないことがわかった」

ただ、政府が2011年1月に法案を提出して、それが国会を通れば「やる」ことだけははっきりしているという。

「何をどうやるというのだ！」

集まった代表50人の静岡の園長たちは啞然とするとともに怒り心頭だった。そこで出された主な質疑を紹介しよう。

○質問：現在、保育園には無い入園料、幼稚園でも園や地域により格差がある金額をどう設定するのか？

□回答：まさに今後の難しい検討課題である。持ち帰って検討する。

○質問：良質の保育を守る、質を高めるといって現状では不可能ではないか？長時間保育をすれば保育計画や準備の時間を圧迫する。現状に加えて長時間勤務を強いるのは無理である。

□回答：良質な保育は担保すべきことだ、持ち帰り検討させてもらう。



ステージにも乗せてもらってノリノリだよ♪

○質問：子どもの心の状態より、大人の都合だけで考えられているシステムではないか？システムだけで子どもは育たない。将来問題行動を起こす子どもがでたらでは遅い。

□回答：持ち帰って児童生徒課にも相談する。

○質問：株式会社も参入できることを危惧している。利益優先の会社が10年20年後に結果が出てくる教育の責任を負えるのか、利益が出なければすぐに撤退してしまうのではないか、その対策は？

□回答：株式会社は、利益が出なければ撤退するだろう、しかし教育はそれではない、参入審査基準を厳しくし、撤退にも規制をかけていくつもりだ。

○会場の声：「潰れました」という会社に、どうやって規制をかけるんでしょう？

○質問：幼稚園は学校教育法の位置づけになっているが「こども園」になると、どのような位置づけになるのか？

□回答：学校に位置づけされるか、福祉施設に位置づけされるのか、まだ分からない、学校教育法を改正してこども園になると、幼稚園も保育園もなくなるが、未定だ。

○質問：現在は県から認可されているのが学校法人立幼稚園だが、こども園は市町村が管轄することになるから、市町村の財政によって教育の質が左右されるのではないか？

□回答：実際、市町村から園にお金が行くことになるので、市町村の財政によって教育内容に優劣がつかない何か仕組みを考えなければならない、ただそこは

市町村の首長の考えが優先されることに…。

○会場の声：結局、国は責任を放棄して、市町村に丸投げってことかな。

○質問：給食については、幼稚園では外部委託で給食会社に依存しているが、自園に給食施設が必要なのか？必要なら給食室の整備に2〜3千万かかると思うが、自腹か？

□回答：こども園という形にするなら調理室は必要になる。今後財政的に予算があれば何らかの補助はやっていかなければならないだろうが、まだ自園給食と決まったわけでは無い。

○質問：こども園に移行したくても、空き教室が無い園もあれば、経営が厳しく改装できない園もある。そもそも多様な保育形態を提供するといったときに、全国一律でこども園化する必要があるのか？

また、待機児童を解消するのであれば単純に保育園を増やせばよいのではないか。

□回答：今返答することが難しいので持ち帰って検討する。

○質問：今、課長補佐にお聞きしただけでも何も分からないことが山積なのに、とにかく来年国会を通し25年度から実施という。それでは混乱は必至だ。長い間培ってきた大事な子どもたちのシステ

ムを大きく変えるのであるから、急がないで十分検討して頂きたい。

□回答：皆様方に支障が無いようにやっていきたい。お金を減らしたら幼稚園さんについてこないと考える。拙速過ぎるという意見をどこでも聞くのだが、通常このようなものは、これまでは現場で、できるのか下から積み上げて検討していくのだが、今回は政府として大枠の方針が決まっているので、それに沿ってやっていかなければならないというのが第一義の考えである。それをやらなければならないのが私の仕事だ。

法案が国会で通るかどうかは別として、通ったとしても必ず移行措置として3〜5年の期間を設けるので25年にスパッと切り替わることにはならない。

(以上、意見交換会の記録より)

いかがでしょうか、このやりとり。

たった3ヶ月ほど前のことですが、あと1ヶ月後には「やる」かどうか決めるという話なのです。最後に課長補佐もついに本音を話してくれましたが、「これならだいじょうぶ、やりましょう」というコンセンサスがとれてからやるのが普通で、このやり方は通常と違うのです。しかも幼稚園が誕生して約100年来培ってきた、こどもを育てる文化を大きく変えようというのです。

子どもの心を見ていない、という質問をしていた園長もいましたが、この根源的な問題については理念的なこと（悪く言えば

キレイゴト) しか議論されずに理念を実現させるための具体的な内容は空欄のまま、システムだけが論じられているのが現状なのです。

更に問題点を挙げますと、子育て新システムは、単に幼保を一体化して冒頭に書いたような目標を実現させるだけでなく、保育分野を国家の成長産業にしようという思惑があります。

保育分野に商売というパワーゲームを導入し、一般企業にも門戸を開き淘汰を進めれば、補助金で安穏と運営してきた保育業界も活性化し、質も上がるだろうと…。

安穏としてきたという点では、当てはまる場所もありますでしょう。その点は業界も多いに反省すべきだと思います。

■現場はいま

前出の全日本私立幼稚園連合会は10月26日、政府の「こども園」構想の輪郭が見えたところで、4月の提言をより強くした「緊急声明」を発表し、幼稚園廃止を前提とした幼保一体化に絶対反対の立場を明確にした。

保育園サイドも保育を守る全国実行委員会、日本保育推進連盟、社会福祉法人日本保育協会を主体とする菅直人総理大臣宛ての署名活動が11月中旬頃から急ピッチで始まっている。他の保育団体もあちこちで反対運動を活発に進めている。

その主張については、各団体のホームページなどをご覧頂ければ見ることができる

ので、私がくどくど書くのはやめておきます。



みんなで声をそろえて「ハイハイハイ♪」

私たち沼津市でも、遅まきながら現場からの声をあげようということで、動き出している。幼稚園、保育園がそれぞれに声をあげると業界団体の保身ととられてしまうため、幼保が連携して、子どもたちの健やかな育ちのために声をあげようということになりました。

私もその準備に追われているところです。

話はかわりますが、高齢者が家族から離れ、所属する組織の無い人々の孤独が「無縁社会」というネーミングで社会問題化している報道を見聞きします。それを地域のネットワーク構築や福祉の充実で補おうという動きがあります。これ自体は大切なことですが、もっと根本から考えることも必要だと思うのです。

人間の土台作りに携わる私からみると、病気にさせておいてあとから薬を処方するようにしか見えません。社会の絆の基本は

家族の絆です。親が子育てを外注すればするほど親子の絆は“か細く”なります。

たとえば“か細い絆”を持って成長した人が、高齢者などの孤独な人たちに寄り添い、フォローする福祉に、うまく携わることができるのでしょうか。また、逆に受ける立場になったときに、他人を信じ、絆を作り温かい交流をしていくことができるのでしょうか。

子育ては人の心を育てることであり、幼稚園、保育園は、家族以外の人間関係、社会との絆を作る第一歩の場所であります。

今の改革では、国が福祉への責任を放棄し、福祉をサービス化する介護保険制度を導入したことによる弊害と同じようなことが、保育・教育現場でも起こってくることは予想できるのです。

保育現場の混乱はストレートに子どもたちに影響を与えるでしょう、いくら保育者に気持ちがあっても、システムという大きな流れが変わって行く中では、踏みとどまれるのもわずかな時間です。

そうなる前に、現場の声を上げなくてはならない、声を上げられない子どもたちの代弁者としても私たちは声を大きくしていきます。

11月に入って、保育園の全国組織でも、反対のための署名活動が急遽始まりました。私たち沼津市でも、遅まきながら幼保が連携して勉強会を開き、反対の立場を表明するべく準備を進めているところです。

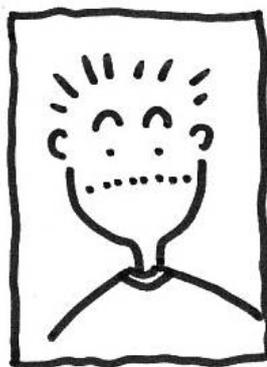
※写真と本文は直接関係ありません。今回は固い話だったので楽しい写真を入れてみました。

学校法人松濤学園 原町幼稚園

定員 200名 6クラス

幼稚園歴 27年（内園長歴 8年）

<http://www.haramachi-ki.jp>



ツルヤシュイチ